
神節式 [月夜美] -TUKUYOMI-

アスタリスク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神節式 「月夜美」 - TUKUYOMI -

【Nコード】

N3940E

【作者名】

アスタリスク

【あらすじ】

見方を変えれば、見逃している幸せだつてあるかも知れませんかね…。

（前書き）

短編、神節の続きになっています。ご了承ください。

あの綺麗な月を仰ぐ刻は、私、いつも独りぼっちなの。

あの綺麗な月が夜に浮かばない刻、私は眠りに着いてしまつから。
だから結局私はいつも独りで、独りは凄く寂しくて。
憎いくらいに冷たくて綺麗な、満月。

誰にも愛されない。誰にも大切に思われない。

それが私なの。

x x x

今夜は蒼明たる満月だ。

いつも影で視界を遮るのは夜だけど、彼女の手には掛ればそれらを
照らし確実な物にするのは造作も無い事。

最近、彼女は想像の太陽に同情するくらい、美しくなった気がする。
る。

そんな月に夜道を視せられて散歩をしていると、やがて感覚的に
色々な物が周囲に観えてきた。

辺りを皓く、俺の目が受け入れ始める。

血の通う事が無く、ただ其処に存在するだけのアスファルト。
そんな死道への罪を償うかの様に、気持ちばかりの並木が先へ先
へと音を連ねている。

仄かにして続くその並木道は、何者にも干渉されるのを疎遠して
いるみたいに、俺を避けていたのだろう。

眉をひそめる。

変な違和感が耳を伝ってくる、何の音だろうか。いや…。
誰かが泣いているのか、この先で。

そう判断するや否や、俺は足の赴くままに歩を進めた。

x x x

泪は、何でこんなにも皓^{しろ}いんだろう。

「私のせい？」

微笑んでみても、その虚空がまた皓を観せるのは私のせい。

私が世界を暗くしてしまう。

どんなに泪の原因が解っても、その泪が原因によって暗くなるな
ら。それはただの皮肉でしょう？

心の中で、そうやってもう一人の私に話しかけてみた。

私は、ただ皓く。ただ皮肉を私に観せるだけ。

いつもと同じ、冷たい顔。

× × ×

今夜が満月だから、そんな気は少ししていた。

古びた木造の、草木の蔭が這った小学校の校舎が見えてきた。

真つ皓に満月の光を月光浴した、穢れの一点も許さないだろうその校庭の隅。俺はそこから横へと連なったアスレチックを見渡し、さらにその中のジャングルジムを眺めた。
違和感の招待はあいつがしたのか。

「月読…」

泣いていたのは月読、か。

なんだか久しぶりだな…。

× × ×

なんだか、素直に懐かしくて嫌な気配がする。

校門の方から？

私は泪を手で拭いて、自分が照らして皓光とする校庭の奥を見据えた。

あれは…。

夜…。

× × ×

純粹で何の混じり気の無い真の皓^{こう}髪。

その冷たい光を象徴する蒼白の瞳も相変わらずだ。

俺は神秘的な校庭を横切り、当たり前の如くジャングルジムの前まで歩いて行った。

月読は軽く体操座りをして、ジャングルジムの頂上で座っていた。

「久しぶりだな、月読？」

俺はなるべく優しい笑顔で言っただつもりだったが、彼女はそれが嫌だったらしい。

頬が少し濡れていて、それが彼女の先程までの泪を意味している。

「月読って呼ばないで、その名前は私の名前じゃない」

ジャングルジムの下の方へ、俺は溜め息を吐きながら腰を掛けた。月読の泣き顔がその行動の拒否を示している。

余程嫌いなんだな、俺のこと。

「でも俺は夜、お前は月だろ？」

「月読は、人間が考えた神話の名前でしょ…。嫌なの……」

彼女は顔を伏せて、声を籠らせてそう言った。

なるほど、悪い冗談のつもりであだ名にしていたが。そんな理由が。

それにしても「…。どうしたんだよ…。泣いたりして」

「別に、哀しいだけだもん」

その理由も含めて質問したのだけど。

哀しい、か。月の精にして何でこんなにも月読は人間らしいのだろうか。

俺なんて、涙を流す方法さえ解らない。きっと宵だってそうだ。

「何が哀しい」

知らず知らずの嫉妬にも似たその言いぐさに、俺は自ら月読の返答に期待した。

「私が、月である事が哀しいの」

月読は自らを仰ぎ見て、そう呟いた。

俺も彼女の本当の姿を仰いで見るが、哀しいと思える理由があのかの月はどこにあるのだろうか。

ただ、俺はお前の事を美しいとしか思えない。
もっと自分に自信を持っていたいにな。

「俺は、夜の事好きだけどな。暗くて落ち着くし」

初めてかも知れないが、月読は俺の顔を見つめた。
ただ、顔がどことなく怪訝なのが頂けない。

「だから何よ。私は月が嫌いなの、いつも独りだから…。きっとみんなの嫌われ者なのよ…」

そう言った月読の声は泪を含んだ物になっていた。
どうしようも無い奴だ、それは勝手な妄想だろうに。

「嫌われてると何故思うんだ？」

「夜は、みんなと手が繋がっているから良いわよ…。私はいつも独り、いつもみんなが仲良くしてるのに私だけが独りで。あそこで…」

月読は、ただ空に浮かんでいるだけの自分を仰ぐ。
感情的な月読も初めてだが、まさかこいつはいつも自分が独りぼっちだと思っていたのか。

「独りだと思っていると、独りにさせて無いと思っている奴に失礼じゃないか？」

「そんなの居ない。私が世界を皓くするから、みんな私を嫌うんだもの」

皓く、するか…。

宵から暁に掛けて月は空に現れ続ける。

その間、月は俺達の世界を照らし続けるのに。それが嫌われる理

由って言うのか…。

「確かに俺や宵は自分の中にお前を持つてる。だから、俺達は完全な存在になれないし、俺は完全な影で世界を包めない。それは事実だ」

「うん…」

x x x

宵とか夜とか、みんなが完全な存在になれないのは。私が世界を
暗くするせい。月のせい…。

だからみんなは私と仲良くしてくれない、嫌うの。いつも独りで、
みんなが仲良くする様を静かに見届けるのが月である私の宿命…。

「夜、貴方の呼び方。正しいのかも知れない」

「え？」

人間が月を神として崇め、それに伴い月読と言う偶像が人の心に
産まれた。

神は、昔から孤独であるが故に神なんだもの。

「孤独なのだから。私は月読と言う意味を持つ存在なのかも知れな
い」

孤独で孤立していて、今の私に当てはまるのかも知れない。

「いや、字が違ふと思う。本当はな、お前は月を読むと書かないんだよ」

字？

年月、時間を読み解くと書いて月読じゃなかったかしら。

「お前は人間が創つた月読みたいに、孤独な存在じゃないからな…」

噓。

満たされている存在には虚ろな者の意識なんて知り得るはずが無いのよ。

「だから嫌いよ…、夜なんて…」

嫌なのに、もうこんな思いしたくないのに涙が、溢れる。
虚ろだから、もうすぐ枯れ果てるだろうに。
なんで…。

x x x

月読は、切れ切れとしたか細い声で俺の事を嫌いと言つと、また顔を伏せた。

泣き虫だな、全く。

「本当だよ、お前は独りじゃないだろ。自分をよく見つめ直してみろよ」

「え…」

月読が見飽きただろう、自分の姿を潤んだままの瞳で仰いだ。
俺の方を向き直って、その泪をポロポロと一粒ずつ流す。

「いつもと同じだもん…、夜う……」

「違う。お前はいつも俺達と一緒に居ただろう？何で気付かなかったんだよ」

首を少しだけ傾げて、また泪を数粒程。

「宵も、俺も、暁だってそう。俺達はいつもお前を見守って、いつだってずっとお前を抱き続けて来たじゃないか」

「私を…？」

× × ×

そんな。私をずっと抱き続けて来た？
なんでそんな事を言うの…。

「ほら、もう一度見方を変えて見な」

私は、夜に言われた通り。よく自分の姿を見つめてみた。

…。

「あ…」

夜が、いつもより優しそうに微笑んでいた。

× × ×

月読の目が見開いていた。

でも、少しだけ嬉しそうだ。いつもの俺に見せる顔じゃない、女の子らしい笑顔…。

「自分がどう見える？まだ独りでポツンと浮かんでいる様に見えるか？」

「…ううん」

そう、月はやっぱり美しい方が似合う。

「どう見える？」

「私が、…夜に包まれてる」

「そう、だから。お前の月読の字は孤独を意味する偶像の字じゃない」

月読が、ゆつくりとジャングルジムから降りて来た。

音も立てずに俺の目の前に立って、俺の顔を一心に見つめてくる。

「どんな字に成るの？教えて…、夜」

「そうだな。お前は最近綺麗になったからなあ」

その蒼白な瞳が怪しげに俺を見る。

いかにも真剣な期待をしてくれているみたいだ。

「ねえ…」

「うん、夜の美しい月。それで月夜美、つくよみ良いだろ？」

「
…」

× × ×

夜の、美しい月。
つくよみ
月夜美？

「この月夜美は、どんな意味を持つのか？」

「俺と宵と暁。世界を影にする存在と、美しくそれを照らす月がい
つも共に存在する意味だから。だから少なくとも孤独を意味するも
のじゃない、共存の意味だ」

共存。

独りじゃないんだ。

これからは自分を見ても孤独なんて思えない気がする。ううん、
もう独りなんて思わない。

「…嬉しい」

「だから、これからは泣くなよ。月が泣いたら雨が降りそうだし」

私は、勘違いしてたのかな。

「ん、もう泣かないっ」

久しぶりに嬉しくなった。胸の辺りが温あったくなった。

でも、ちょっと相手が不満かも…。

× × ×

何時間か経った。

もう夜の刻が過ぎ去ってしまつて、辺りが明るくなつてしまつて。なんだか暁だか朝なのかわからないくらいの刻。

ジャングルジムの隣、その小さな子供用砂場。

気づけば、その砂のノートに細い線で『月夜美』と。私は何度も指でなぞっていた。

汚れるのは嫌いだけど。指に付いてしまったこの砂の汚れは、あまり悪い気はしない。

でも、月夜美かあ。

夜の美しい月。

ん、『夜の』美しい月？

何か、嬉しいけど複雑かも…。

e
n
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3940e/>

神節式 [月夜美] -TUKUYOMI-

2010年10月16日13時49分発行